

関係各位

平成17年7月吉日

(社)日本メタル経済研究所
理事長 石川 丘

平成16年度成果報告会開催のご案内について

拝啓 時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。平素より当研究所の事業の推進につきまして、ご支援ご協力賜り誠にありがとうございます。

さて、当研究所では、非鉄金属に係る調査研究活動を実施しておりますが、平成16年度に実施した事業につきまして、下記のとおり成果報告会を開催いたします。

つきましては、ご多忙中とは存じますが、ご出席賜りたくご案内申し上げます。なお、ご出席の有無につきましては、8月28日(月)までにE-mailもしくはFaxにてご連絡いただきたく、よろしくお願い申し上げます。

敬具

記

1. 開催日時:

平成17年9月2日(金)午後1:30~4:50

2. 開催場所:

虎ノ門パストラル 本館8F 「けやき」
電話 03-3432-7261

3. 事務局:

企画部長 浅井 又は 池田 (E-mail: ikeda@merij.or.jp)
Tel 3506-0700、Fax 3506-0701

以上

平成16年度(社)日本メタル経済研究所研究成果報告会

平成17年9月2日

1. 開会挨拶

石川 丘 理事長 13:30

2. 調査研究報告

銅電解プロセスの動向

前田 正俊 前主任研究員 13:35~14:10

東アジアの銅加工業

近藤 敏 主任研究員 14:10~14:45

中国の銅スクラップの現状と見通し

宮川 昌樹 主任研究員 14:45~15:20

(コーヒーブレイク)

15:20~15:40

中国の亜鉛産業の現状と見通し

丹野 文夫 主任研究員 15:40~16:15

プラチナの中長期需給見通し(燃料電池用白金族金属需給動向調査)

(注:本調査は、資源エネルギー庁からの委託による他2者との共同調査)

中村 重俊 主任研究員 16:15~16:50

(閉会)

16:50

注)各報告事に質疑応答5分間を設定

~ については、[日本自転車振興会補助事業](#)です。

各調査研究報告の概略

銅電解プロセスの動向

前田 正俊 前主任研究員

銅地金の生産は、近年のTC/RCの低下により製錬所の経営が厳しくなるなか、電子関係の用途増加により品質の向上が要求されるとともにコスト低減による競争力の確保が必要となっている。電解精製法には、種板を使用する従来法とステンレスの陰極版を使用するパーマネントカソード法があり、生産性と品質の向上を図るためパーマネントカソード法の導入が世界的に進みつつある。本レポートは、こうした電解精製法の世界적인趨勢を明らかにするとともに、今後解決すべき技術的問題等を抽出し、銅電解プロセスの設備対応に関する提言を行った

東アジアの銅加工

近藤 敏 主任研究員

東アジアにおいては、対中国輸出が2003年以降高水準で伸びている。日本、韓国、台湾の製造業の生産シフトが、以前はこれらの国々から対米輸出されていた製品の一部が中国からの輸出に代替され、中国へは生産財が輸出されていると考えられる。また、市場としての中国が台頭してきており、消費財の対中輸出の伸びにも目を向ける必要がある。本レポートにおいては、中国经济との関わりに着目し、韓国、台湾の銅加工業、具体的には電線産業と伸銅産業について現状と動向を分析した。

中国銅スクラップの現状と見通し

宮川 昌樹 主任研究員

中国は、急速に発展する各種産業の銅原料を銅スクラップの輸入によって補っており、世界一の銅スクラップ輸入国になっている。特に、日本からは低品位の混合金属スクラップを多量に輸入し、安価な労働力によって分別して銅を回収している。本レポートは中国における銅スクラップの動向を明確にするために、日本側の輸出状況/中国側の銅スクラップ処理状況/銅スクラップ使用状況等を訪問調査によって確認し、また中国国内の銅バランスの解析から数値的に検証したものである。

中国の亜鉛産業の現状と今後の見通し

丹野 文夫 主任研究員

中国は現在亜鉛の鉱石生産量、地金生産量、地金消費量において世界一となっている。中国の亜鉛産業の全体像をとらえることは、世界の亜鉛産業の今後を考える上で非常に重要であるが、その実態はこれまで明らかではなかった。本レポートは、鉱山、製錬を中心にしながら、従来特に明らかにされなかったリサイクルや消費分野を含めて、その現状を整理するとともに、今後の需要動向についても分析を行い、中国亜鉛産業全体の動向、問題点、今後の展望をとりまとめた。

プラチナの中長期需給見通し

中村 重俊 主任研究員

当研究所は、住鉱コンサルタント(株)、新日鉱テクノリサーチ(株)との3者共同によって、経済産業省資源エネルギー庁より平成16年度「燃料電池用白金族金属需給動向調査」を受託した。将来的に燃料電池の需要増大が見込まれることに鑑み、燃料電池の触媒として必要な白金族金属(PGM)の需給動向を調査し、安定供給を確保するための方策について検討を行ったものである。その中でとりまとめたプラチナを中心とするPGMの2030年までの中長期需給見通しを紹介する。